

初中級日本語クラスのコースデザイン

—初級から中級へのスムーズな移行を目指して—

徳間 晴美・田川 恭識・福池 秋水

キーワード：初中級レベル，総合日本語，コースデザイン，段差の解消

1. はじめに

本報告では，早稲田大学日本語教育研究センター（Center for Japanese Language：以下，CJL）の開講科目である「総合科目群」の中の初中級日本語クラスのコースデザインについて述べる。このコースデザインは，従来指摘されていた初級から中級へのレベル間の段差を緩和するため，筆者らを含む検討グループを中心に行われたものである。本報告では主に教科書の選定や読解能力を補うための教材作成等，検討を重ねた過程を振り返る。また，1学期間の実践の結果を踏まえ，あらたに見えた問題点と，それらに対する改善案を提示する。

2. あらたなコースデザインを行うに至った経緯

2-1. CJL における「総合科目群」の位置づけ

CJL では，早稲田大学の日本語プログラム生，学部正規生，大学院正規生，科目等履修生などを対象として日本語科目を開講している。日本語科目は「総合科目群」，「テーマ科目群」からなり，科目による設定レベルの違いはあるが，初級（1レベル）から上級（8レベル）までの8段階のレベルが設定されている。

本報告で取り上げるのは，総合科目群のうち，「総合日本語3」のコースデザインである。総合日本語3の「3」は，CJLのレベル基準における3レベル（初中級）であることを表す数字である。また総合日本語とは，総合科目群の中に設けられた科目名であり，次のような特徴を持つ¹⁾。

- ① 1学期 15週で授業が行われる
- ② 主教材が決めており，主教材を中心に4技能を学ぶ
- ③ 同じ曜日，時限に特定のレベルの授業が複数クラス開講される
- ④ 各レベルで定められたシラバス・スケジュールに従って運営される
- ⑤ インストラクターがティームティーチングで一つのクラスを担当する²⁾

CJL では 2013 年秋学期時点で 1819 名の日本語科目履修者がいたが³⁾，今後も増加していくことが予想される。このような中で，総合日本語は上記の特徴により，学習者数の増減にも柔軟に対応できる体制を備えていると言える。

一方、総合科目群と同じくCJLの日本語教育を特徴づけるものとして、テーマ科目群の授業が挙げられる⁴⁾。テーマ科目群は総合科目群と異なり、コーディネーターが存在せず、科目担当者が独自に作成したシラバスに沿った授業が行われる。内容は、会話や読解といった特定の技能に特化したものから、学習活動をより広く捉えて展開するものまで多様である。科目担当者が離職した場合などは、次学期以降、当該科目は開講されない。

テーマ科目群と総合科目群を比較すると、テーマ科目群は学習者の多様なニーズに対して幅広く対応可能な科目である一方、総合科目群は学習者数の増減が生じても一定水準の授業が提供できるという意味で、安定的な科目と言える。

本報告で取り上げる総合日本語3も上記の総合科目群の枠組みに含まれるが、これまでいくつかの問題点が指摘されていた。以下では総合日本語3について、クラスの位置づけと目指すこと、および従来から指摘されていた問題点を見ていきたい。

2-2. 総合日本語3の位置づけおよび目指すところ

現在、総合日本語科目は、総合日本語1から総合日本語6まで6つのレベルが開講されている。総合日本語1は、日本語の未習者または初級前半の学習者を対象にした授業であり、日本語の基本的な文法、語彙を学習するとともに、会話や作文についても学ぶ。総合日本語2は、初級後半の学習者を対象とした授業であり、総合日本語1に続いて日本語の基本的な文法、語彙を学ぶとともに、会話や作文、スピーチなども行う。

続く総合日本語3は、初級の終わりから中級前半の学習者を対象とした授業であり、初級で学習した基本的な文法をしっかりと押さえつつ、中級に向けての基礎固めを行うことを目標とする。後でも詳しく述べるが、調査結果をまとめてレポートを書き発表するといった活動も行う。総合日本語4は、中級の学習者を対象とした授業であり、基本的な文法や語彙に加え、やや硬い文章に出てくる文型、表現についても学ぶ。また、他者との対話を通し、自分をみつめ、自己を表現できるようレポート作成も行う。

総合日本語5は、総合日本語4に続いて中級後半から中上級の学習者を対象とした授業である。日本の新聞や新書の一部を抜き出した文章を読み、その中に出てくる文型や表現、語彙を学ぶ。また日本語によるレポートの書き方について体系的に学び、学習者にも数回のレポート執筆を課す。総合日本語6でも5と同じ教科書を使用しているが、総合日本語6は中上級から上級の学習者を対象としており、扱う文章（各課の読解教材）はより難易度が高い。総合日本語6でも日本の時事問題をテーマとしたレポート執筆を数回行い、ディスカッションなどを行う。

以上のように総合日本語3は「初中級」レベルに位置し、中級以降の日本語能力の基盤を固める重要な学習段階と言える。しかしながら、今回のコース内容の改定以前まで学習者や担当教員間で総合日本語3の授業内容について問題が挙げられていた。そのうちの主要な問題点が、いわゆる初級から中級への「段差」である。従来、総合日本語3になるとそれまでに比べて急に内容が難しくなる、という声が学習者のみならず授業担当者からも多く寄せられていた。その背景には様々な要因があるが、その一つに、初級の総合日本語と中級の総合日本語の指導方法の違いが挙げられるのではないかと考えられる。例えば、文型の導入にしても初級の授業では一つひとつの文型の導入が丁寧になされ、文型の定着

に焦点を当てた練習が行われることが多い。それに対して中級以降では、実際の使用場面から切り離された形での導入や、あるいは文字情報による導入が多くなる。また教科書の構成も、初級では学習項目が含まれた短い会話が課の中心であるのに対し、中級からは課ごとに設定された中～長文の読解が中心となることが多い。一般的に中級以降では、読みの力が重要になってくることから、上記のような指導方法および指導内容の変化は当然であるものの、あまりに急激な変化は学習者にとって大きな負担になると考えられる。また、教科書以外の活動を例にとっても、中級以降では社会的、学術的なトピックについて自己の意見を表明するというような能力が求められるようになる。初級では比較的身近で日常的なトピックが扱われることが多いことから、学習者は難易度が飛躍的に上昇するように感じてしまうおそれがある。

2-3. 総合日本語 3 の教科書変更とあらたなコースデザイン

以上の問題を受け、CJL では総合日本語 3 のコースデザインを見直し、それに伴って主教材となる教科書を変更することとなった。教科書の選定についての詳細は次章で触れるが、コースデザインに当たっては以下の点を目標とした。

- ・日々の授業を通し、初中級レベルにふさわしい「読む」「聞く」「書く」「話す」の能力を身につけること
- ・教科書以外の各種活動を通して、自分の意見や社会のことについて考え、発信できる力を養成すること
- ・一連の学習を通して、論理的に日本語を理解し、表現できるようになること

以上を踏まえ、初級とのつながりを念頭においた上で中級への「基礎固めをする」ことを重視した。

3. コースデザインの具体的な作業

3-1. 教科書の選定

2013 年秋学期まで、総合日本語 3 では『日本語中級 J301－基礎から中級へ』（スリーエーネットワーク）を使用していたが、2-2 で述べたように、初中級の段階としては難易度が高いという問題があった。また、教材で取り上げられている語やトピックが古いという問題も指摘されていた⁵⁾。そこで、主教材となる教科書を変更することとし、主に 3-4 レベルのコーディネーター担当者を含む検討グループを中心に選定作業を行った。

主教材変更の検討作業は、2013 年 2 月頃から行った。初中級・中級の総合教科書から検討した結果、候補は『中級へ行こう－日本語の文型と表現 59』（以下、『中級へ行こう』スリーエーネットワーク）、または『中級を学ぼう 中級前期』（以下、『中級を学ぼう 中級前期』スリーエーネットワーク）に絞られた。選定理由は、初級を修了したばかりの学習者に適したレベル設定であること、各課の本文がある程度関心を持てるテーマであり、古くなりにくいトピックが選ばれていること、練習問題も適当な量が設けられていること、等である。

総合日本語 3 の教科書選定は、次レベル以降の総合日本語（4～6）のコースデザイン

にも影響が出る。そのため、総合日本語3で『中級へ行こう』を採用した場合、この教科書に続く『中級を学ぼう 中級前期』、『中級を学ぼう－日本語の文型と表現82 中級中期』（以下『中級を学ぼう 中級中期』スリーエーネットワーク）を総合日本語4以上でどのように扱うかが課題となった。検討の中で、まず総合日本語5、6については、2013年度春学期より主教材が変更となったばかりの時期であったこともあり、短期間での主教材変更は避けることになった。したがって、総合日本語3と総合日本語4で『中級へ行こう』『中級を学ぼう 中級前期』『中級を学ぼう 中級中期』の3冊をどのように扱うかを考える必要が生じ、メリットとデメリットを考えながら慎重に検討を進めた。

その結果、前後のレベルである総合日本語2、総合日本語5とのつながりを考慮し、総合日本語3では『中級へ行こう』、総合日本語4では『中級を学ぼう 中級中期』を採用し、『中級を学ぼう 中級前期』については、総合日本語3でも総合日本語4でも扱わないことを決定した。『中級を学ぼう 中級前期』を扱わないこととした理由としては、前後のレベルとのつながりを重視したこと、受講者に教科書を2冊買わせることを避けようとしたこと、『中級を学ぼう 中級前期』の内容はコースデザインの工夫によってカバーできることが挙げられる。

これに伴い、解決すべき課題として挙げたのが、「読解教材の補強」である。具体的な内容を3-2で示す。

3-2. 読解資料の作成

3-1で述べたような検討過程を経て、総合日本語3、4の主教材が決定したが、その結果、解決すべき問題点がいくつか残された。その一つが、総合日本語3で採用した『中級へ行こう』の「本文」の長さであった。中級以降で使用される総合教科書では、各課に一定の長さの文章があり、その文章に出てくる文型、語彙、表現を学ぶ、という構成になっているものが多い。このような教科書において、本文は文型や語彙の使用例であり、話し合い活動、短作文等のトピックを提供すると共に、読解力を養成するという役割を担っている。しかし『中級へ行こう』はこの本文部分が300～600字程度と短く、改定前と同等の読解力を身につけることができるかが大きな懸念点であった。この懸念を打開するためには、補助教材を使用した読解活動の時間を確保する必要があった。

この読解補助教材としては、市販の読解テキストを採用する、一般の新聞や書籍、ブログ等から引用する、検討グループ内で書き下ろす、各授業担当者に一任する等、さまざまな案があり検討したが、学習者の経済的負担、著作権問題、クラス間の公平性等々を考慮すると、書き下ろし教材が最も問題のない形であるという結論に達した。

書き下ろし教材作成は以下のような手順で行った。

①検討グループ内でトピックや難易度、長さ等の大まかな方針を策定

内容は、多様な学習者に対応できるよう、学習者にとって身近なトピックであると同時に、特定の学習者が不快に感じる可能性がある話題はできる限り避けることとした。また、教材を読んだ後、クラス内でのディスカッションに発展しうるような内容にすることを意識した。長さは『中級を学ぼう 中級前期』のテキストの長さや『中級を学ぼう 中級中

期』へのつながりを考慮して 800 ～ 1200 字程度とした。

文法や語彙、構文等の難易度については、初中級のレベルに合わせてある程度コントロールするが、やや難易度が高いと思われるものも必要であれば残すこととした。理由は、読解教材として自然な文章であることや学習者にとって興味を持てる内容であることを優先したこと、また、初中級レベル以上の文法や語彙を類推するスキルも中級以上の日本語学習では必要であると考えたことである。その一方、目標語彙・文型を設定することもしなかった。語彙や文型を意識して書き下ろすことにより、文章としての自然さが失われるおそれがあったためである。

②担当者が本文の素案を出し、検討・修正

担当者がトピックを探し、素案を執筆した後、主にグループ内で文章の自然さや難易度等についてコメントし、担当者が持ち帰って再検討、再執筆することを数回繰り返した。

③「読解シート」の作成

本文がほぼ確定すると、総合日本語 3 の準備担当者が書式を整え、内容確認の質問等を加えた「読解シート」を作成した。

以上のような手順の結果、5 編の書き下ろし読解教材が完成した。

この補助教材を使い、「読む活動」を設定した。「読む活動」は、本文を読み、内容を理解するところからクラス内ディスカッションに至るまでの 4 技能を駆使した総合的な活動である。

3-3. 活動の組み立て

ここまで、主教材を用いた授業の概要と主教材の不足部分を補うために行った方策について述べてきた。教科書をベースとした授業は、日本語についての知識を構造的に身につける上では有効であるが、実際の運用能力を育成するという点では足りない部分が多い。その不足を補うために、「活動」の時間を設定した。

この「活動」の時間に行ったことは、テーマに一連のつながりを持たせながら、「①意見文を書こう」、「②調査をしよう」、「③レポートを書こう」という 3 つのステップを踏んで進める「調査・レポート活動」である。まず、「①意見文を書こう」では、学習者が身の回りの事象について感じている疑問や問題の中からテーマを絞る。そして、自分の意見をまとめて意見文の執筆を行い、その内容についてクラス内で発表する。続く「②調査をしよう」では、①の意見文で取り上げたテーマについて調査計画書を書き、周囲の日本人あるいは外国人を対象として調査（アンケートまたはインタビュー）を行い、調査結果を報告書にまとめて発表をする。最後の「③レポートを書こう」は、調査結果を受けて自分の考察を加え、レポートの執筆を行い、クラス内で発表をするというものである。以上の①から③のステップを経る中で、本活動では、抽象的な事柄について日本語でまとめる力、日本語を使ってコミュニケーションする力、日本語で発信する力をつけることを目的とした。

3-4. クイズ作成

教科書変更に当たり、クイズやテストのあり方についても見直しを行った。コースにおいてどのような試験類を実施するかは、学習者にどのような学習を求めるか、ということにも深く関係している。2014年度の総合日本語3では、クイズは各課の最初に「語句クイズ」を実施し、また二つの課が終わった後に「語句・文法クイズ」を実施することとした。「語句クイズ」は各課の予習を、語句・文法クイズは各課の復習を念頭において設定された。総合日本語においてはクイズやテスト類の実施を授業出席の動機づけとする場合もあるが、2014年度の総合日本語3についてはそのような目的は設定せず、単純に予習と復習の学習効果のみに焦点を絞った。

また日々のクイズのほか、中間テストと期末テストも実施した。これは、成績評価の一環とするだけでなく、学習者に予習および復習を促すことも大きな目的としている。それにより、語句・表現や文型をしっかりと定着させ、中級へスムーズにつなぐことを目指した。

4. 2014年度春学期の実践を経て見えてきたこと

4-1. 総合日本語2とのつながり

授業で用いた教科書『中級へ行こう』は、59の文型と表現を扱っている。ただし、この59には、「～の整理」という形で初級の文法項目の復習が14（「自動詞・他動詞」、「比較」、「と・ば・たら・なら」、「受身」など）含まれており、中級の基礎となる文法項目を整理しながらあらたな文型や表現を学ぶことができるものであった。実際のところ、総合日本語3のクラスといっても、学習者によって初級段階の学習にかけた時間や履修時点での習得度はさまざまであり、いざ復習してみると基本的な活用形などが定着していない学習者も少なくなかった。そのため、このような初級の復習を丁寧に行いながら進めることができたのは、総合日本語2とのつながりをスムーズにするのに有効であったと考える。

教科書本文については、当然未習の文型や表現も含まれてはいたが、長さがそれほど長くはなく、各文型と表現を学習した後に、再度本文の精読を行っていたため、内容がわからないままに過ぎていくということは避けられていたのだと推測される。このように、教科書の内容については、初級修了からのつながりを重視して選定したこともあって、総合日本語3の受講者の大半を占める初級修了レベルの学習者にとっては、無理なく学習を進めることができたと考える。

4-2. 総合日本語4とのつながり

2014年春学期の授業を実施し、まず、「調査・レポート活動」では学習者が自身でテーマを決めて意見をまとめ、調査および考察を行うという過程において、それぞれが掘り下げて考えを深めることができた。一方、教科書を中心とした文型・表現や読解の学習内容の面においては、学習者および授業担当者から、改定以前の総合日本語3に比べて内容が易しくなった印象があるという声が聞かれた。これは、教科書選定の際に意図したことであったため出るべくして出た反応である。しかし、総合日本語3の中でも伸びしろのある

学習者にとってはやや物足りなさが感じられていた様子であること、また、中級に向けてもっと語彙を増やす必要があるのではないかといった指摘もあった。

「物足りなさ」を軽減させるためにできることは何かを考えてみると、教科書本文の短さを補うために作成した読解資料の扱い方に工夫の余地があると思われる。この読解資料は教科書の本文より長さの面でも難易度の面でも、ある程度読み応えがあるものであった。しかし、その位置づけと目的が学習者および授業担当者に十分明確に示せていなかったために、教科書の読解を補い切れていなかったようである。コーディネーションの中で、教科書本文との違いを明確に打ち出し、速読や要約の練習を行うなど扱い方を工夫することで、中級につながる読解力をより高めることができると考える。総合日本語４とのつながりを今後さらに意識して中級への橋渡しをしっかりと行う必要があると言える。

5. 今後に向けた改善点

4-1 で述べたように、今回のコースデザインによって、当初の課題であった総合日本語２との段差の解消はある程度実現できたと言える。今後は、総合日本語４とのつながりについて改善を行っていくことが課題である。

以下で、2014 年秋学期の授業に反映させた改善点について報告する。これらがどのように影響していくか、今後も継続して総合日本語３の授業運営全体を見渡していきたいと思う。

(1) 語彙の拡充

語彙については、まずは教科書で扱われているものをしっかり理解することが大切であるため、学習者の予習に役立てることを目的とし、「語句予習ノート」を作成して冊子の形で渡すこととした。また、教科書で本文を扱う際には、「新しいことば」として挙げられているものを生かしながら、類義語や対義語、コロケーション等、語彙を豊かにするような扱い方をコーディネーターから提案していきたい。学習者が知っている語彙を引き出しながら、発展的に増やしていけたらと考える。

(2) 文型・表現の補充

4-1 で述べたように、『中級へ行こう』で扱っている文型・表現は初級の復習も含まれていることもあり、初中級で学ぶ内容としては数が十分とはいえない。教科書のシリーズとしては総合日本語３と総合日本語４の教科書の間に『中級を学ぼう 中級前期』があり、総合日本語４で『中級を学ぼう 中級中期』を扱っていることから、『中級を学ぼう 中級前期』で取り上げられている文型・表現は可能な限り総合日本語３で扱うことが望ましい。2014 年秋学期には、『中級を学ぼう 中級前期』で扱っている文法項目などから 11 項目を選定し、授業内容に盛り込むこととした。

(3)「読む活動」の位置づけと目的の明確化

「読む活動」については、その位置づけと目的を明確に示すことができず、ねらいが十分に達成できなかった反省を踏まえ、2014 年秋学期では、授業担当者に事前の説明会で位置づけや読み物の書き下ろしの意図について説明し、その扱い方について具体的に提案した。「読む活動」という名の通り、学習者の考えや意見などが表明でき、交換できるような教室活動につなげることができるとなおよいと考える。

6. おわりに

本稿では、まず、CJL の開講科目の一つである総合日本語 3 について、初中級日本語クラスの位置づけを示し、2014 年春学期に向けて行ったコースデザインの内容を述べた。そして、1 学期間の実践を通して具体的に見えてきた改善点については 2014 年秋学期に反映させていくこととした。

「レベル間の段差」が一つの大きな課題であったが、教科書改訂を中心としたコースデザインの中で、解決に向け少しずつ前進していると考えている。今後も、初中級というレベルの意義も念頭に置きながら前後のレベルとのつながりを調整していきたい。また、総合日本語 2、総合日本語 4 のみならず総合日本語 1 から 6 全体、ひいては CJL の他科目全体の中で総合日本語 3 の位置づけを捉える広い視野を持ち、引き続き授業内容を学習者にとって意味あるものに発展させていきたいと考える。

注

- 1) http://www.waseda.jp/cjl/dat/overview/02_gaiyou.pdf
- 2) CJL におけるインストラクターには、インストラクター（非常勤）とインストラクター（任期付）がある。
- 3) http://www.waseda.jp/cjl/dat/overview/01_shushi.pdf
- 4) http://www.waseda.jp/cjl/dat/overview/04_themekamoku.pdf
- 5) 一例として、第3 課は「デスクトップ型パソコン」と「ラップトップ型パソコン」の特徴について説明された文章が本文となっている。しかし、現在日本では「ラップトップ型パソコン」という語はほとんど使用されていないという現状にある。

（とくま はるみ，早稲田大学日本語教育研究センター）
 （たがわ ゆきのり，早稲田大学日本語教育研究センター）
 （ふくいけ あきみ，国際交流基金日本語試験センター）